

心の故郷—市民が守る増田誠コレクション

角井千代絵／瀬戸厚志

増田誠が生前に発行した画集の序文に、支援者への感謝の言葉が寄せられている。

「ご支援下さった心の故郷(ふるさと)釧路の皆様」

この一文が、戸籍上の故郷である山梨への言葉の前に、書かれているところに注目したい。出生地としての故郷は山梨県都留市だが、画家・増田誠を育んだ故郷は、北海道の釧路。その街に対する感謝の意が、この一文に込められている。釧路の人々の厚い支援こそが、世界で活躍する一人の画家を育て上げた。

### 本展開催まで

増田誠没後 20 年が経った 2009 年、NPO 法人北海道グラウンドワーク（札幌）の成田全史氏と、釧路市にある鳥取神社宮司・木下正明氏から増田誠展開催についての相談があった。両氏は釧路に多数ある増田作品を調査し、画家の出身地・都留市も訪問するなど、遺族及び作品を既に調査されていた。釧路ゆかりの画家・増田誠を再び世に出し、「地域が守ってきた作品による展覧会を、地域のために開催したい」という、展覧会開催への両氏の熱い思いが、今回の企画の出発点となった。

母体となっている NPO 北海道グラウンドワークは、活動の理念として

「北海道を元気にするお手伝い」を目的として、社会教育、学術、芸術、文化、スポーツなど、さまざまなフォーラムやイベント活動を行い、豊かな社会の実現に貢献する—

その理念はまさしく美術館活動の使命と合致している。

乱立する NPO のなかで、美術活動を取り上げている団体はきわめて少ない。それは、費用対効果の面できわめて厳しい運営を迫られることが予想され、継続的な活動が困難なことが大きな要因の一つだろう。観覧料で経費が賄える展覧会は極めてまれであり、さらに波及効果についても数値として算出しにくいなど、NPO の活動としてはハードルが高い。しかし、美術館と NPO が手を取り、展覧会を作り上げていくということが可能であれば、それは今後の地域文化の醸成につながる新しいスタイルとなるだろうし、美術の街・釧路に新たな風が吹き込まれることが期待される。

本展開催の如何に関わらず、郷土の作家の調査、研究は展示や教育と並んで、美術館の重要な使命。増田誠についても、地道な調査が続けられていた。しかし、増田作品の多くは民間企業や個人宅に所蔵され、その数も膨大で、まとまった調査の機会は何もなかった。市民に深く浸透している作家だけに、普段の会話のなかで語られることもエピソードも多いが、一方で、昔の記憶や伝聞等の話が先行して、全体像がつかみにくい作家でもある。

両氏の申し出は館としてもありがたいチャンスであり、2 年後の展覧会に向け、釧路市内の各所蔵家の調査に同行させていただくこととなった。

### 今回の調査について

今回の調査は、釧路市内を中心に行なった。当時の支援者の多くは既に亡くなられ、次世代に受け継がれていたものの、作品の来歴などはわからない作品が散見された。時代の流れとともに、失われているものは情報だけではなく、作品そのものが失われている場合もある。調査に漏れた作品も、少なからずあると思われるが、基礎的データは収集できたものと考えている。幸いにも新聞社等の後押しもあり、展覧会を準備している様子が記事等

で紹介されると、「私の家にもある」といった情報が寄せられ、非常に好意的に協力をいただいた。

また企業では、応接室や役員室、倉庫に至るまで案内いただくなど、非常に手厚い協力をいただき、スムーズに調査を進めることができた。この場を借りてお礼申し上げるとともに、釧路の人々の美術への深い愛情に、接する機会となったことを記しておきたい。

## 企業のコレクション

調査した多くの作品の中でも、質量ともに充実しているのは、増田の生前から強力な後援者として幾度となく紹介されている、三ツ輪運輸・栗林定四朗氏、大栄産業・小船井武次郎氏のコレクションだ。

三ツ輪運輸で保管されているコレクションは、100号を超える代表作が含まれ、三ツ輪ビル(釧路市)にある釧路画廊で一部が展示されている。パリの街角やパブでの人々の様子、ヴァイオリン弾きなどを題材にしたものが多く、フランスに渡った後、画家として一定の成功を取めた時期の作品にあたる。

「蚤の市のムッシュ」(サロン・ナショナル・デ・ボザール)、「ヴィオロン弾き」(サロン・ドートンヌ)、「キョスク(キャリテ・ド・ラ・ピー)」(ル・サロン)などは、フランスで行われている各展覧会(サロン)へ出品された作品であり、増田誠のもっとも脂がのった時期の代表作とっていい。作品の状態も非常に良く、釧路画廊という専用の展示スペースを設けて公開するなど、先代が遺した文化遺産を、受け継いでいこうとする積極的な姿勢がうかがえる。

大栄産業本社(釧路市)に展示、保管されているコレクションは、ヨーロッパで描かれた大作のほか、釧路川に停泊する漁船の風景や、描きかけと思われるキャンバスなど、時代的にも幅広く、資料的価値も高い。

なかでも興味深いのは、「手風琴を弾く男」や「ノートルダム」など深い青を基調にした作品だ。ほの暗い色彩を使い、細長く引き伸ばされたノートルダム、魚眼図的な視点で描かれたパリの街を背景に唄い踊る男など、シャガールにも似た夢想的な雰囲気が漂い、実験的な試みがうかがえる。増田の作品の中では異彩を放つ作品だ。

さらに、晩年に描かれたであろう、宗教を題材に取った「最後の晚餐」も含まれ、幅広い年代に渡るコレクションに、釧路からフランスに渡った後も、物心両面に渡って支援した熱い想いが感じられる。

## 支援者の輪

大栄産業に納められている「結婚式」には、フランス人の花婿花嫁と並んで、当時の大栄産業社長・小船井武次郎氏が描かれている。支援者への増田の感謝の想いが、題材となった作品だ。

同様の作品が、三ツ輪ビル内にある食事処「醍醐」の特別応接室に飾られている。こちらにも、同じく支援者の一人で当時北海道銀行・島本融氏が、増田が師事を仰いだ画家・上野山清貢、三ツ輪運輸・栗林定四朗氏とともにワインを片手に談笑している。作品のタイトルは「オマージュ・ア・メーメトル(Hommage à mes maître/私の師達への讃歌)」まさに、当時の人間関係を映し出している記念碑的な1作だ。

支援者の輪は、会社の社長のみにはとどまっていない。

個人の持つ作品の多くは、「父が大栄産業で働いていた」「三ツ輪運輸に勤めていた」など、近親縁者が支援会社に在職時、購入した作品が多い。つまり、会社の社長が個人的趣味で支援したというよりは、会社ぐるみで一体となって一人の画家を支援したといえる。しかも複数の会社が集まって増田誠後援会という組織を作るなど、なかば市民運動的に作品を買い、制作を支えた。このような強力なサポート組織は、当時も今もほかに例を見ない。また芸術家を支えようと言う動きは、増田誠にとどまっていない。同様の経済人らによるメンバーが、釧路出身

の日本画家・久本春雄を支援するなど、芸術・文化を愛し、人を育て地域に伝えていこうとする、郷土への愛情と誇りが感じられる。

栗林氏が生前語っていたという「釧路をよく言う人は必ずエラクなる」という言葉にも、その志の一端が垣間見える。

### エピソードのある作品

個人の持っている作品は、前述のように購入した作品が多く、必然的にサイズも小さなものが多い。ここでは特に釧路時代に描いた作品、また個人的なエピソードを持つ作品に焦点をあてたい。

1950年に描かれた「雪景色」は、現在個人宅に保管されている。釧路に移り住み、看板屋「光工芸社」を設立した30歳の頃の作品である。釧路川河畔の陽光を受ける街並みが雪に覆われ、伸びやかで落ち着いた筆致は、冬の釧路の静かな空気感を十分に描き出している。後年、パリに渡ってから川沿いを題材にし、水面にこだわって描き続けた増田。河岸への独特の着眼を感じさせる、初期の1作である。

また、懇意にしていた取引先にお礼として描いた肖像画もある。「高橋氏肖像画」は、近所にあった高橋製麺所の看板制作を注文されたお礼として描かれた。厚紙に油彩で描かれた肖像画は、支援者への心尽くしのおくりものの1作となっている。なお、制作した山笠の金文字は、今なお釧路市南大通の一角に残されている。

また、渡仏前後を物心両面で支え続けた花柳寿登芳氏の自宅に残されている自画像、少女像などの作品は、色彩は一様に暗いが、試行錯誤の跡が色濃く残り、渡仏前夜の画家の心情を強く感じさせる。

さらに、作品にあわせて家を建築した所蔵家もいる。F100号の大作を個人宅で展示するため、家の建築時、2階の部屋の壁面に絵をはめ込み、その後壁を組んでいったという。扉も窓も絵より小さく、2度と取り外すことができないため、本展への出品はかなわなかったが、作品への愛情を感じるエピソードの一つとして紹介したい。

### 市民が作品を守る

美術館は、作品を守りつつ、公開し、多くの人に美術の喜びを知っていただくことが使命。世代を超えて受け継いでいく、美術のノアの箱船と言っていい。

しかし、美術館に置いておくことが、美術品にとって最大の幸福かというと、そうではない。家にあり、会社があり、またはショーウィンドーに飾られる。そうして生活を彩ることもまた、幸福な作品のあり方だと思う。

美術館という特殊な空間ではなく、日常の生活の中に絵が飾られ、会話の中に芸術家のエピソードがある。そのような街の雰囲気、さらに芸術文化を育て、故郷への愛情を育み、街の魅力を発信していく力強い手段となるだろう。

今回の調査では、増田誠を通して、釧路の街の文化度の高さを改めて確かめる機会となった。本展を機会に作品への理解と愛情が深まり、郷土の歴史が若い世代へと受け継がれていくことを、心から願っている。

(釧路市立美術館 学芸員)